

「海外ビジネス研究」の教育方法

山 崎 克 雄

はじめに

I. 履修ガイダンス時の資料作成までの経過

II. 講義目標とテーマ

III. 現地訪問日程

IV. ビジネスコミュニケーション評価

V. 今後の研究課題

巻末・「海外ビジネス研究」の講義要綱

はじめに

「海外ビジネス研究の教育効果」と題して『環境と経営』第17巻第2号に寄稿した。

その結論部分を次のように結んだ。

来年以降の課題として、「(海外での) フィールド・スタディ」を講義目標に掲げるのであれば、費用対効果の観点で、国内企業訪問は1～2社に留め、事前にホームページなどで学生に企業調査を行なわせ、明確な課題や確固たる目的意識を持たせ、その上で海外研修に臨ませてはどうかと考えている。

今年度は「台湾訪問による海外ビジネス研究」とし、前回の経験を生かしながら、海外ビジネスにおけるコミュニケーションをより強調するようなシラバスを作成した。本稿は海外研修による英語学習の成果を中心に、履修ガイダンス時の資料作成までの経過、講義目標とテーマ、訪問日程、研修成果や今後の課題などについての報告である。

I. 履修ガイダンス時の資料作成までの経過

担当教員の専門ゼミナール生の中に前年度のタイ研修に参加した学生が3人おり、2月に開催された履修ガイダンス時には、その学生らが中心になってパワーポイントによる資料を作成し、発表も手分けしておこなった。この段階では本年度の研修国がどこになるかは、正式決定されていなかったが、初年度の経験を生かしつつ、海外ビジネスの共通語(Lingua Franca)である英語が使用されている台湾に学生の身をおくこととした。台湾

は民度が高く、親日的であるばかりではなく、日本が先頭にたった雁行的経済発展モデルの中心国であり、1970年代のFour Tigersの一角を担った。日本企業の投資件数も多く、905件(東洋経済新報社『海外進出企業総覧—2011年』調査)にのぼっている。そのうえ、アジアの中ではシンガポール、香港、フィリピンに次いで英語が常用されている。同国では、長年にわたり政治・経済面で米国との関係が深かったこともあり、中国名とは別に英語のファースト・ネームを持ち、日常生活ではそちらを使用している。

4月に入り、8月下旬実施の5泊6日のケースで、参加人数が2～3名、4～10名、11～22名の場合のホテル代、現地での朝夕食代、移動用専用車両代込みの競合見積もりを二社の旅行代理店(B社とK社)に対して依頼した。その結果、現地の旅行業者と提携関係のあるK社に12万円/人で発注した。訪問企業に関しては、担当教員が前年度に事前調査に赴いた日系企業を含め、面積あたり店舗数では日本を凌ぐコンビニエンスストアの実態調査として、セブンイレブン本部の訪問などを折り込むこととした。交渉して事前に訪問許可がおりた日系および台湾企業は次の通りである。

日系企業：ヤマハ発動機(オートバイ製造)、
古河電気工業2社(共に電解銅箔製造)、マブチモーター(微型モーターの心臓部品生産)

台湾企業：Paiho Group(マジックテープ生

産)、統一企業公司(傘下にセブ
ンイレブン)、Walton Advanced
Engineering Inc.(半導体製造)、
Hamaster Technology Co.(電
子テキスト作成ソフト開発会社)

II. 講義目標とテーマ

第1週(4月10日)の講義には10名の履修希望者が出席した。配布したシラバスの「講義目標とテーマ」には次のように記した。シラバスは巻末に添付する。

現代国際経済社会の中で注目されているアジア諸国を対象地域にしぼり、進出企業の訪問を通して研究する。アジアで活躍する企業に関して、日本と現地を訪問してその経営手法を比較し、その企業のグローバル戦略を学ぶ。アジアビジネス研修の2回目として、台湾にある日系企業を訪問する。日台での同一企業内での経営の違いを学ぶこと、また両国の文化が経営に及ぼす影響について考えることを目的とする。

異文化経営を学ぶためには、英語によるコミュニケーション能力が必須であるので、英語教員の協力を得て、英語学習を6週分組み込んだ。そこではビジネス英語学習の基礎を養成する狙いがあった。基礎学習終了後は、現地企業において英語での質疑応答ができるような訓練を実施した。初年度同様、英語が国際コミュニケーションを図る上で重要なツールであることを体得させるため、少なくとも英語に対するアレルギーを払拭できるよう、Pancho Elite Rotary CluとKaohsiung Glean Rotary Clubに於いては全て英語によるプログラムの進行を依頼した。その中では全員が英語による自己紹介をし、晚餐の際には現地ロータリアンと英語で会話をせざるを得ない環境の設定をした。また個々の実力を把握させる意味で第11週にTOEICを実施し、これにより英語学習意欲の向上に弾みを付けて現地に臨み、帰国後(8月27日)に再度、同一方式の異なる問題により研修の成果を確認した。

III. 現地訪問日程

日程の最終版は下記の通り。

- 8月20日(月): 中部空港に集合し、台北着、ヤマハ発動機関連企業訪問、台北市内ナイトツアー
- 8月21日(火): 日中市内観光、夕方に板橋群英扶輪社(Rotary Club)訪問
- 8月22日(水): Paiho Group(マジックテープ企業)訪問
- 8月23日(木): 古河電気工業関連2社(古河銅箔股份有限公司と台日古河銅箔公司)訪問
統一企業グループ(傘下でSeven-Elevenを展開)
- 8月24日(金): Walton Advanced Engineering Inc.(半導体関連企業)、マブチモータ関連企業、Hamaster Technology(ソフトウェア開発企業)を訪問、夜に高雄拾穂扶輪社(Rotary Club)で懇談
- 8月25日(土): 市内観光後、新幹線で台北に戻り、夜中部空港着

IV. ビジネスコミュニケーション評価

1. 履修者の理解度と研修態度評価

まず研修出発前に履修者に次のようなメッセージを送った。

「主たる研修目的は英語によるビジネスコミュニケーション能力を身につけることにある。2回のロータリークラブでの英語発表はもとより、現地企業による英語での説明があるので、電子辞書(英和・和英)などを持参すること。旅行中は英語漬けになること。毎日の夕食後のミーティングは英語で行う。Thinking in English during the travel !」

表1「理解度と研修態度」(5段階評価)は今年度から取り入れた教育メソッドである。これは教員による5段階の主観的評価であるが、「I.ホテルで実施した英語によるミーティング時の態度及びに理解度」では、訪問企業による説明の理解度や教員との英会話能力と

表1 理解度と研修態度（5段階評価）

	Ⅰ.ホテルで実施した英語によるミーティング時の態度及び理解度					Ⅱ.現地企業（組織）の英語説明の理解度や積極性及び自己表現力					合計	Ⅰ - Ⅱ		
	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目		3日目	4日目	5日目
学 生 A	3	N/A	4	4	3	N/A	5	2	3	4	28	2	1	-1
学 生 B	3	N/A	3	4	3	N/A	5	2	3	3	26	1	1	0
学 生 C	4	N/A	4	4	4	N/A	4	2	4	4	30	2	0	0
学 生 D	4	N/A	5	5	4	N/A	5	3	4	4	34	2	1	0
学 生 E	4	N/A	4	4	4	N/A	4	2	3	4	29	2	1	0
学 生 F	3	N/A	3	4	4	N/A	4	2	3	4	27	1	1	0

項目Ⅰ：1日目はヤマハ発動機の新竹工場を訪問し日本語による説明を受けた。

従って、ミーティングではcapacity, productivityなどの用語を解説した。

2日目はRotary Clubでの会合・交流終了が遅かったので中止した。

項目Ⅱ：2日目と5日目はRotary Clubでの発表及び周囲の現地人とのコミュニケーション力

3日目はPaiho Group、4日目はOne Enterprise Corporation訪問時の態度

態度を評価している。5点は教員の質問に対する応答が的確かつ迅速、3点は受け答えは速くはなくとも、少なからず回答の体を成している、1点は考えた末に沈黙し発言できなかった者。4点、2点は夫々の中間的なレベルを示している。

一方、「Ⅱ. 現地企業（組織）の英語説明の理解度や積極性及び自己表現力」に関する評価では、英語説明に対する理解度や質問をする積極性に加え、ロータリークラブでの自己紹介、大学生活の説明や現地人とのコミュニケーション能力を観察した。5点はいずれの項目に関しても申し分ない場合であり、1点は思うように発表出来ず、聞き手に意思を伝えられなかった場合である。3点は多少のおぼつかなさはあるが、何とか発表できた状態であり、4点と2点は夫々の中間点とした。従って、夕食後に実施される項目Ⅰはその日の出来事Ⅱのフォロー・アップの性格があるので、ⅠマイナスⅡは通常プラスとなる。学生Aの5日目のみマイナス1となっているのは、最終日であったためか、ミーティング終了後の外出に気を取られ、集中出来なかったからであろうと思われる。

教員はミーティング時にオープン質問をするので、英語以前に経営の知識が必要となる。例えば、初日はヤマハ発動機の関連会社において、全て日本語で説明を受けたので、それ

らに関係する経営用語を英語で述べ、理解が困難となれば、容易なことばに置換して質問した。多くの場合、学生からはこの段階で回答が得られた。

項目Ⅱにおいては、2日目と5日目はロータリークラブでの自己表現力（自己紹介）と積極的なコミュニケーション実施状況の評価であり、3日目と4日目は台湾企業による英語説明の理解度と質問する積極性の評価である。自己紹介に関しては、事前に準備をして会合に臨んだので、前者の方が後者に比し一様に高得点となった。また前者のふたつのロータリークラブでの得点差は、2日目の方が5日目のクラブより若いロータリアンが多く、雰囲気的に話し易い状況にあったからであろうと考えられる。

項目ⅠとⅡは内容的には相互に関係があり、8日分（4日間×2）の満点は40点となる。通常科目のABC評価を適用するならば、32点以上がA、28点以上がB、そして24点以上がCとなる。その結果、Aが1名、Bが3名、Cは2名であり、講義による教育効果があったものと認められる。

表2 現地出発前と帰国直後のTOEICテスト結果

		Part 1		Part 2		Part 3		Part 5		Total(1)		Total(2)		
	2012年夏	6/19	8/27	6/19	8/27	6/19	8/27	6/19	8/27	6/19	8/27	6/19	8/27	
氏 名	英語力・自己申告	10点満点		30点満点		30点満点		40点満点		110点満点		100点満点		改善
学 生 A	聞くのは苦手・話すのは高校生程度	-	7	-	18	-	7	-	11	-	43	-	39.1	N/A
学 生 B	中学2年・挨拶程度	5	5	13	9	6	9	12	11	36	34	32.7	30.9	-1.8
学 生 C	英検 3 級 トラベル会話OK	7	7	12	14	13	14	20	13	52	48	47.3	43.6	-3.6
学 生 D	TOEIC520点 英検準 2 級	7	7	13	13	18	19	18	18	56	57	50.9	51.8	0.9
学 生 E	TOEIC420点	5	8	17	19	11	22	21	10	54	59	49.1	53.6	4.5
学 生 F	中学2年・挨拶程度 英検 4 級	5	6	12	16	8	8	17	12	42	42	38.2	38.2	0.0

注：Part 1：写真描写問題 Part 2：応答問題 Part 3：会話問題 Part 5：短文穴埋め問題

2. TOEICのテスト評価

学生Aは就職活動と重なったため6月19日実施のテストは未受験であるが、英語力の自己申告とは裏腹に、8月27日のリスニング結果は平均点以上であり、苦手意識が先行しているくらいが見られた。5名の学生のうち、台湾研修以前(6/19)と以後(8/27)に実施したTOEICの改善度がプラス2名、マイナス2名、同点が1名であった。参加者は一様に、英語によるコミュニケーション力は現地研修中に上達したと感じていたが、5名中3名の試験結果はそのことを裏付けてはいなかった。但し、細部分析するとリスニング力を測るPart 1からPart 3¹⁾に関しては、学生BのPart 2を除き、全て同一点もしくは上昇している。Part 5はリーディング(語彙や成句の問題)であり、日本でも習得可能であるが、Part 1からPart 3の結果を見る限り今回の研修では、リスニング力と同時にTOEICのテストにはなかったスピーキング力も相乗的にパワーアップし、ある程度の効果はあったと考えられる。

1) 須部宗生・河合亜弥子「TOEICの特性と可能性—教育現場での活用—」『環境と経営』第15巻第2号、2009年12月、P25

前年度はTOEIC Bridgeで現地研修の前後にテストを実施²⁾したが、上記のような分析結果には到らず、リスニング力アップは個別の学生評価と言えるものであり、全体の傾向値としては体を成していない。学生DとEは前年度のタイ研修にも参加しており、TOEIC BridgeとTOEICの違いはあるものの、海外研修以前と以後の得点差は両年度ともにプラスに転じ、研修の成果を見出すことができた。

表1「理解度と研修態度」と表2「TOEICテスト結果」からは履修者の正の相関関係がうかがえる。表1の高得点者はTOEICテストでも良好な結果であった。今年度から取り組んだホテルでの夕食後のミーティングは、履修者に対する研修中の一定の緊張感と学習目的の明確化に役立ったものと考えている。

3. 提出されたレポートによる評価

提出課題は下記の項目に関して、A 4二枚程度(写真・表・図などは枚数に含めない)でワードファイルにて、8月30日までに提出

2) 山崎克雄「海外ビジネス研究の教育効果」『環境と経営』第17巻第2号、2011年12月、P100

することを指示した。

- (1) 訪問先の日系企業から1社を選択して説明を受けた内容と印象・感想
- (2) 訪問先の台湾企業から1社を選択して説明を受けた内容と印象・感想
- (3) 「海外ビジネス研究」全体との関連で、この旅行から何が学べて、自分の将来にどのように役立てるのか
- (4) 自分の「英語によるビジネスコミュニケーション能力」評価

前年度と同様にレポートの評価を「気づき」(内省能力)、「将来指向」(積極性)、「観察力」(分析力)、「日本語能力」(誤字、脱字など)の四つの視点で評価した。5段階評価による採点結果は下記の通りである。

今年度の6名の平均点は17.7点(20点満点)であるが、昨年度の留学生2名を含む9名のそれは15.4点、留学生を除く7名では16.3点であった。これは少なからず参加学生の学年差に起因すると考えられる。今年度は4年生2名、3年生3名、2年生1名で、平均は3.2であり、ほぼ全員が十分な基礎学力を備えていると考えられる。一方、昨年度は同様の計算式で2.4、留学生を除くと2.3であった。

「気づき」に関しては、4の評価が中心であり、全員が4以上であったことは心強く、帰国後にTOEICを受験して早期に650点をめざすと、計画的な抱負を述べる学生もいた。学生BとFを除く4名が19点と18点に集中している。またTOEICの上位2名はレポート評価点でもトップと遜色ない反面、下位2名はレポートでも下位に甘んじている。前述の

昨年度も参加した2名の学生のうちの1名は14時から19点へ、もう1名は同一の18点であった。今回は参加者が6名と少人数であったので、引率教員の目が行き届いた結果かもしれない。

V. 今後の研究課題

今年度は英語によるビジネスコミュニケーション能力向上に注力し、英語教員とのオムニバスプログラム(英語学習が6週)を採用したが、表2の海外研修以前と以後のTOEIC評価は課題を残す結果であった。7月17日に本科目が終了し、8月20日に現地へ出発するまでの間に、英語学習効果が薄れてしまうのかも知れず、次年度からは6週では満たしきれない英語学習の不足分を補う方策を講じる必要性があろう。また4年生の2名は就職活動のため、講義への出席率がきわめて低かったが、本教科を履修した4年生に与える教育上のインパクトが大きいことは、昨年度や今年度の4年生参加者の提出レポートから窺える。従って、4年生もより一層、履修しやすいようなシラバスの作成も課題であろう。今年度から取り組んだ引率教員によるホテルでのブラッシュアップ・ミーティングは、履修生に目的意識と適度の緊張感を与える効果があった。卒業後に経営のグローバル化が進む社会で活躍できる人材を育成するために、本教科はベスト・ソリューションの模索を継続していく。

表3 提出レポートの評価

	気 づ き	将来指向	観察力	日本語能力	合 計
学生A	5	4	5	4	18
学生B	4	4	4	4	16
学生C	5	5	4	5	19
学生D	4	5	5	5	19
学生E	4	4	5	5	18
学生F	4	4	4	4	16
平均点	4.3	4.3	4.5	4.5	17.7

「海外ビジネス研究」講義要綱

授業科目名： [海外ビジネス研究] 前期 火曜日 1限(9:00～10:30) 3305 教室
担当教員名： 山崎 克雄 須部 宗生 Home Page=<http://www.ssu.ac.jp/home/yamazaki/> 2単位
[講義目標とテーマ]

現代国際経済社会の中で注目されているアジア諸国を対象地域にしぼり、進出企業の訪問を通して研究する。アジアで活躍する企業に関して、日本と現地を訪問してその経営手法を比較し、その企業のグローバル戦略を学ぶ。アジアビジネス研修の第2年度として、台湾にある日系企業を訪問する。日台での同一企業内での経営の違いを学ぶこと、また両国の文化が経営に及ぼす影響について考えることを目的とする。

[講義の内容と進め方]

今回の訪問予定は、下記の台湾の関連企業と商業店舗です。

- (1) スカイラーク(飲食)? (2) ファミリーマート(小売業) (3) 古河電工(銅箔事業)
(4) ヤマハ発動機(オートバイ製造) (5) マブチ(モーター製造) (6) セブン・イレブン(小売業)

日台両国における経営比較のため、国内の上記企業の関連事業所も可能な限り訪問する。

第1週：(4/10)講義目標の詳細、台湾訪問スケジュールや費用の説明・とりあえずの希望人数の確認

第2週：(4/17)日台経済関係、6社の簡単な紹介、

第3週：(4/24)台湾文化と企業経営、経営の国際移転に関する理解

第4週：(5/1)班編成と班ごとのグループ討議

第5週：(5/8)グループ討議

第6週：(5/15)ビジネス英語学習 その1

第7週：(5/21)ビジネス英語学習 その2

第8週：(5/29)ビジネス英語学習 その3

第9週：(6/5)ビジネス英語学習 その4

第10週：(6/12)ビジネス英語学習 その5

第11週：(6/19)ビジネス英語学習 その6

パスポートのコピー提出最終期限。

パスポートを持っていない学生は、3週間はかかるので手続きを早めにとりかかって下さい。

第12週：(6/26)国内事業所訪問 (ヤマハ発動機・コミュニケーション・センターと工場)
8時55分までに現地(コミュニケーション・センター)集合です。

第13週：(7/3)近畿日本ツーリスト(株)の台湾事情説明と集金。

第14週：(7/10)国内事業所訪問・研修

第15週：(7/17)詳細スケジュールと課題(班ごとで自学自習するテーマ)の確認

第16週： 期末試験を現地での研究成果によるレポート提出で代替する。